

「注意」 答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。
 本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。

□ 次の文章は、一九六〇年代のカナダで、ヘヤー・インディアンという狩猟採集民とともに暮らした、原ひろ子氏によるものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ヘヤー社会で「自分で覚える」とはどういうことなのでしょうか。

(中 略)

テントで、私が何げなくおしゃべりをしながら、折鶴を折っていると、十歳前後の子どもたち(女の子が多かったのですが、男の子もいました)がとてもおもしろがりました。そして、「もう一つ折ってくれ」と何度もいうのです。何羽も折っているうちに、「紙をちょうだい」といって、自分で一生懸命に折り始めました。けっして、「初めにどうするの?」などと聞いてきません。「もっとゆっくり折って」とも、「これでいい?」ともいいません。「教えてよ」といわないのはもちろんです。いろいろやってみて、自分で、「これでできた」と思うときに、私のところに見せに来るのです。そして私が、「この鶴は疲れてるみたい」とか、「これは、遠くまでとびそうだ」とか「きれいな」とかいうのを楽しそうに聞いています。

そして彼らは、「ヒロコが作ったので、自分も作った」と思っているのです。何羽も何羽も鶴を折ったあとで、子どもたちは「ほかに何か作れるか?」と聞いてきます。①「こんどは違ったものを教えてよ」とはいいません。

こういうことは、私が、アメリカのフィラデルフィア近郊やピッツバーグ市の中流家庭でヘビー・シッピングをしながら折り紙をした時の体験とはずいぶん違って、興味深く思いました。一九五九、六二年当時、Origami は今日ほどアメリカで普及はしていませんでしたが、アメリカの子どもは、私が二、三羽仕上げるか仕上げないうちに「May I make a crane (swan)?」(ほくも鶴を折ってごらん?)とか、「How do I fold this?」(これはどうやって折るの?)とか、「What do I do next?」(次はどうすればいいの?)とかいう子どもが多いようでした。私の折り進み方がちょっと早いと「Do slowly please」(もっとゆっくりにやってみて)とか「Oh, you go too fast」(早すぎるよ)といって、自分のペースに私を合わせようとします。ヘヤーの子どもたちが、私の折り進み方のペースをあるがままにまかせているのは対照的です。

さらに、ヘヤーの子どもたちは、折鶴をたくさん自分で折ってみて、その折り方を②「ものにしたと思われるころ、はじめに、「ほかに何が作れる?」と次のものへの興味を示す場合が多いのですけれど、私の接したアメリカの子どもの中には、ヘヤー・タイプの着実型のほかに、自分で一羽か二羽折ると、すべ「Can you make something else?」(他にも何か折れる?)とか、「Show me something else?」(他にも教えてくれる?)とか「I want to make a Christmas tree」(クリスマス・ツリーを折りたいな)などという出す、せつちか型や創造型の子どもたちがいました。

一口にいうと、アメリカ人の子どもは、ガヤガヤとおしゃべりしたり、質問を連発したりして、騒がしく、折り紙を覚えていきます。そして、子どもと私との交流の中で覚えていくのです。しばらく時間をおいてその子どもに再会すると、折鶴の折り方そのものは忘れてはいるけれど、私が折鶴を覚えてくれた人だということをよく覚えているといった場合も少なからずあります。

ところが、ヘヤーの子どもたちが、折鶴を覚えるときには、その紙と子どもとの間に強い交流が存在するのであり、彼らは、私と紙との間にある交流(つまり私が折紙を折っている状況)を、自分で再現しているといえると思います。ですから、③「子どもと私の間の交流は彼らにとって、主観的には重要でないのです。」

折り紙の例からもヘヤー・インディアンのいう「自分で覚えた」の内容が少しわかってきたようです。さらに例をさがしてみましょ。

ヘヤー・インディアンやその近隣のインディアンの子どもたちの中には、イヌーヴィクというマッケンジー河口の町

にある寄宿学校（一〜九年生）に行っている者があります。そこには、カナダの北極海沿岸西部に住むエスキモーの子どもたちも来ています。そこで教えている先生の話では、手工にせよ、計算にせよ、エスキモーの子どもたちはちよつとやってみて、下手でも間違つていても、その結果を先生のところに持って来て、「これでどうですか？」ときくそうです。先生は、それを見て、「よろしい」とか、「次にはここに気をつけなさい」といつてあげます。そして、そのときの励まし（ほむし）が影響（えいぎょう）して、エスキモーの子どもははりきって覚える者が多く、一般（いっぱん）に進度が早いということ（こと）です。

ところがインディアンの子ども、中でもヘヤーの子どもは、先生が「どう、できは？」と聞くと、にたつと笑うだけで、自分で納得（なつとく）するまでは先生のところに計算の紙や、手工の作品を見せに行きません。しかし、いったん持ってきたときにはかなりよくできているし、手工などでは傑作（けつさく）がよくあるとのこと（こと）です。しかし、大勢のクラスの中では、教科の進み（あひ）はエスキモーにおくれてしまい、とりのこされがちだということ（こと）でした。

つまり、白人の先生にとって、エスキモーは教えやすく、ヘヤー・インディアンは教えるにくいというのです。逆にいうと、「学校」というシステムの中で、エスキモーの子どもたちは、「教える」という役割（やくわり）をもった先生を使いこなし、ヘヤーの子どもたちは、それができなかったともいえます。

白人社会との接触（せつしよく）に際して、この地方では、エスキモーの方が早く機械をこなすようになってくるとよくいわれますが、この現象には、イヌーヴィクの先生の観察に見られるような④両者の差が要因となっているかもしれません。

つまり、折鶴（おりづる）や食卓（しょくたく）の並べ方といったものは、「自分で覚える」ヘヤー方式で見事に習得されるのですが、無電装置（むでんそうち）の操作（そうさ）や修理、飛行機の整備、美容師の技術、看護婦（かんごふ）としての技術など（こと）これらは、一九六〇年にカナダ政府が、エスキモーやインディアンの若者（わかもの）に教えようとしていた技術（ぎゆつ）です）は、教師に、一定の教課程をふんで教えてもらう方式の方が、能率的だからです。

ヘヤー・インディアンは機械いじりそのものがきらいなのではありません。ただ、その使い方を覚えるときの覚え方の好み（このみ）が強いのです。もちろん、一九五〇年以降（いこう）の学校教育（がく）の普及（ふきゅう）が、ますます進むにつれて、ヘヤー・インディアンの学習（がくしゆ）に対する態度は多少変化（へんか）するかもしれないのですが。

（原（はら）ひろ子『子どもの文化人類学』による）

注 ヘヤー・インディアン……カナダ北西部の極北地域（きょくぺいちいき）に暮らしてきた狩猟採集民（しゆりやうさいしゆみん）。カシヨーゴティネともよばれる。

エスキモー……北極海沿岸などに暮らしてきた狩猟採集民。イヌイットともよばれる。

看護婦……今でいう看護師。

問一 —— ①『こんどは違ったものを教えてよ』とはいいません」とありますが、それはなぜですか。

問二 —— ②「ものにした」について、ここでの意味に最も近いものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 鶴（つる）を折り終えて、それを手に入れた

イ 自分（おれ）なりの鶴の折り方（おりかた）をつくりだした

ウ 鶴（つる）を折るのに飽（あ）き、別のことをしたくなった

エ 鶴（つる）の折り方を他の子ども（こども）にも教えるようになった

オ 鶴（つる）の折り方を身につけ、折れるようになった

問三 —— ③「子どもと私（わたし）の間の交流（かうれ）は彼ら（かれら）にとって、主観（しゆかん）的には重要（じゆうじやう）でない」とありますが、ここで「主観（しゆかん）的には」と述べるのはなぜですか。

問四 —— ④「両者（りやうしや）の差（さ）が要因（やういん）となっているかもしれませんが、筆者（しんしや）がこのように考えるのはなぜですか。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

海を臨む高台に、ポツンと家が建っている。

それは、津波から逃れた、村ではたったひとつの家で、

赤髪のちいさなおばあさんが暮らしている。

いまこの家に、遠くから来た旅人と、津波で死んだ人が訪ねてくる。

おばあさんと旅人と死んだ人は、初めて出会うようである。

庭先で旅人が声をかけると、おばあさんが家の中から現れて、

あらあ、あんたたちよく来たこと、と言った。

そして、海に向かってひらけた扇型の地面の方を向いて、ふたりに語りはじめる。

あつちから来た波と、こつちから来た波が、ドオンとぶつかって。

おばあさんは思いがけず軽やかにそう言って、両手をパチンと打った。

そしてね、あつちとこつちに波が広がって、すべてが持っていかれたの。

おばあさんの両手は、ひらひらと西と東へ離れていく。

旅人は、海際からつぎつぎとなぎ倒されていく電信柱を想像する。

波間をすり抜けてくる自動車は、どんな動きをしていただろう。

叫び声が聞こえただろうか。

ものが壊れる音は鈍かっただろうか。

獣たちもちゃんと逃げたのだろうか。

そんなことを尋ねようと考えている旅人をよそに、

おばあさんは、でもね、わたしは津波を見なかったの、とつぶやいた。

家族みんなが戻ってきてホッとしたところに、

津波が来た来たって逃げていく人の声を聞いたの。

それで、あつちという間に庭まで水が来たんだけど、

家までは入ってこなくて助かったの。

だからわたしが語るのは、ぜんぶ誰かに聞いた話だ。

死んだ人は、うんうんと頷きながらほえんでいる。

旅人は、^①はつと息を呑む。

わたしずっとここにいたのに、何も見てないんだもんね。

だから、あんたとおんなじだ。

おばあさんはそう言っつて、旅人の方をじつと見る。

旅人は、そんなことはないですよ、と答えながらも、

② じゃあ誰に話を聞けばいいのだろう？ と思った。

何かを知れる気がしてここへ来たのに、おばあさんさえも知らないというのだから。

それで旅人は、それなら死んだ人に尋ねてみようか、と思ったのだけれど、

死んだ人は、もつと話を聞かせてください、とおばあさんにせがんでいる。

旅人が、あなたが一番知っているはずではないですか？ と問うと、

死んだ人は、いやいや、わたしはほとんど何も知りません、と答える。

あの日わたしが見たのはほんの一部のことですから、

大したことはないのです、ときみしそくにほほえむ。

おばあさんは、うーんと首をひねってから話を始める。

わたしは怖くて行かないんだけどね、

まちの方もぜんぶ流されて、なんにもないんだつて。

避難所だつて、何力所もやられたんだつて。

体育館の中はぐるぐるぐるつて洗濯機みたいになつたから、

たくさんの身体が絡まつてたつて言うんだよ。

まるで地獄だね。

おばあさんはそこで、ふう、とため息をついてから続ける。

だから、わたし考えるんだ。

死んだ人はひと思いに逝つたのかなあつて。

大事な人が死んでいるのを見つけた人の気持ち、どれだけ悲しかったらうつて。

家族探して安置所巡つた人の気持ち、どれだけ苦しかったらうつて。

旅人は絶句したまま、

ここへ来る途中に見た、ひしゃげた建物たちのことを思い出していた。

すでにまちの瓦礫はよけられ、あちこちに花が手向けられていた。

旅人には、手作りの祭壇の前でしゃがみ込む人にかける言葉はなかつた。

おばあさんの話に打つ ③ 相槌も、ひとつも持っていないなかつた。

死んだ人は、おばあさんの話にうんうんと頷きながら、

やっぱり大変な人もいたんでしようね、と言つて手を合わせた。

そして、④ 他には、他には？ と更におばあさんにせがむ。

おばあさんは首を傾げながらもまた話しはじめる。

このまえ小学校に物資をもらいに行ったらね、隣となりにいた人に声をかけられたの。その人、せっかく生き残ったけど、家も仕事も失って、これからどうしようって泣きだした。

つられてわたしも泣いてたら、みんなも集まってきてね、どうしようね、これからどうしようねって、抱だき合あって泣いたの。

旅人は、輪わになって泣く人たちの姿すがたを思い浮うかべて、ぼろぼろと涙なみだをこぼす。

おばあさんは、ありがとうね、と言って旅人の背せなか中なかをさする。

死んだ人は、そうかそうかと頷うなずいて、

みんながやさしくてうれしいね、と顔をほころばせる。

おばあさんは、みんな失うったものが大きいんだもんね、とつぶやいてから、だけどわたしは何もできないんだ、と言いった。

だって、話を聞くくらいはできても、してあげられることってないでしょう。

旅人が、ぼくも同じです、何も代かわってあげられない、と鼻はなをすすると、

死んだ人は、わたしが一番何もできないですよ、と言って頭かを掻かいた。

おばあさんは、⑤ あらまあ、と驚おどろいた顔かほになる。

そうかそうか、あんたが一番何もできないんだもんね。

それが一番つらかったべ。

おばあさんはそう言いって、死んだ人の頭かをよしよしと撫なでる。

ごめんねえ、あんた、一番つらかったべ。

死んだ人は、一気に力の抜ぬけたような顔かほになって、ほうつと長い息いきを吐はいた。

その瞬しゆんかん間かん、海うみから強い風かぜが吹ふいた。

死んだ人は、見る間にぐんぐんぐんぐんと縮ちぢんでいって、ちいさな赤あかん坊ぼうになった。

地面じめんに転ころがった赤あかん坊ぼうは、わんわんわんわんと大きな声こゑで泣なく。

おばあさんと旅人が声をかけても、けっして泣なき止やまない。

もうどんな話はなしも通とじなかつた。

何なにもない風景ふうけいに高い声こゑが響ひびくので、あたりがざわざわと騒さわぎ出す。

木々きぎがざわざわ、風かぜがびゅうびゅう、遠とほくから獣けものたちの声こゑがする。

旅人は、思おもわず赤あかん坊ぼうを拾ひろいあげて、ぎゅつと抱かかきしめた。

すると赤あかん坊ぼうは泣なき止やんで、あたりはすつと静しずかになった。

旅人は、⑥ 赤あかん坊ぼうを連つれて、旅たびを続つけることにした。

